

第 2 部

第 29 回学術集会記録集

会長講演

がん登録からがん対策への期待 「疫学・公衆衛生」と「がん登録」

大木いずみ

地方独立行政法人栃木県立がんセンター
がん予防情報相談部

はじめに

この度、第29回日本がん登録協議会学術集会（栃木大会）を開催するにあたり、会長講演として私のがん登録に関わってきた経緯から「疫学・公衆衛生」と「がん登録」の関係を述べたい。また、本学会のテーマとして「がん登録からがん対策への期待」について込めた思いも伝えたい。

新型コロナウイルス感染（COVID-19）の拡大によって、2020年の2月頃から多くの学会が中止・延期になり、一日も早い収束を願っていたが、東京オリンピックも延期となり、本学会も現地開催ができなくなった。人々の健康、医療がどれほど重要なことかを思い知らされた。そのような中でも学会関係者や参加者のみなさまのおかげで、なんとかWeb上で開催できたことを心からありがたく思う。

なお、疫学・公衆衛生に関する解釈は私の経験上の理解であり、勉強したい人は疫学・公衆衛生に関する教科書を読んでいただきたい。

1. 経験から

人の役に立つ仕事につきたくて、医学部に進学した。2年間の臨床研修を終えると公衆衛生の道に入った。がん登録は2007年から栃木県立がんセンターで勤務することになり携わることになった。専門分野を尋ねられて「疫学・公衆衛生」「がん登録」と答えると、一般の人は困った顔をする。

臨床は、目の前の人を診断、治療計画をたて実行する。患者に寄り添い、最良の技術や知識をもって実践する。一方公衆衛生は、疫学を用いて地域などの人間集団の健康度を把握し、対策を立て実行し、評価する。どのような人が罹りやすいのか、人・場所・時間を知ることが第一歩である。また、曝露を受けた集団とそうでない集団で疾病の発生を比較することによってその影響を知ることができる。そして曝露を減らすことによって

その集団から疾病を減らし予防することができる。個人へのリスクは小さくても大勢の人が曝露される場合、集団に与える影響は大きい。これらを受けて予防、検診、医療、社会復帰など一連の対策によって地域の人々に貢献するのが公衆衛生である。

公衆衛生対策の一つとして現在注目されているのは、新型コロナウイルス感染拡大による影響で、世界中が収束にむけて対策を講じている。

2. 疫学とは

疫学の語源は、「Epi」（上に）「Demos」（人々）「Logia」（学問）から成り、人間集団を対象として人間の健康およびその異常の原因を宿主、病因、環境の各方面から包括的に研究し、その増進と予防をはかる学問である。疫学の定義は（A Dictionary of Epidemiology 第6版¹⁾によると）、「特定の集団における健康に関連する状況あるいは事象の、分布あるいは規定因子に関する研究、さらには、そのような状況に影響を及ぼす規定因子の研究も含む。また、健康問題を制御するために疫学を応用すること」である。簡単にいうと、一人の人を観察すると曝露の有無、アウトカム（疾病）の有無は1か0（ゼロ）であるが、人間集団として観察すると、「どのくらい（何倍）危険」という形でとらえられる。

3. 記述疫学

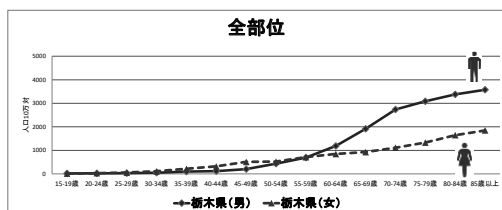
新型コロナウイルス感染拡大による影響を例にとっても、毎日報告される感染者数や死亡者数を、人・場所・時間の点から把握する記述疫学が、インターネットや新聞・テレビで報道されている。人と接することが感染リスクとわかっているので、地域、都道府県、国レベルで対策を立てて実行し、それを評価する。

がん対策においてもがん登録を用いて、この手法を何年も前から目指し実行してきた。医療機関からのがん情報の正確な届出、整理して正しくカウントし、集計する。「人」は、男女でどうか、年齢分布などの点から観察し、「場所」は、どういう地域に多いのか、「時間」は年次推移など増えているのか減っているのかを観察する。

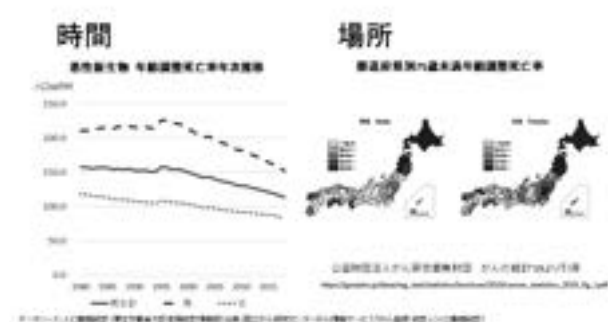
がん登録が実施されると報告書が発行されるが、常に人・場所・時間の観点から記述されてき

た。これが記述疫学の基本である。エビデンスレベルからすると、RCT(無作為割り付け介入研究)や分析疫学(コホート研究・症例対照研究)に比べて低いかもしれないが、これらを抜きにしては進めない。

人 男女別年齢階級別罹患率



栃木県のがん2016年より



4. 公衆衛生と疫学

都道府県や国では、がんに関する様々な統計データから得られる結果を根拠にがん対策を立て、評価する。がん登録は精度の問題からなかなか実態を把握できず、いくつかの先進的な地域のデータをもって日本の推計値としてきたが、現在は法律のもとようやく実測値を把握できるに至った。これからは質の高いデータを蓄積するとともに、さらに対策に生かし、人々に還元できることを期待して本学会のテーマを「がん登録からがん対策への期待」とした。

学会プログラムもシンポジウム・基調講演を始めとして、研修会やセッションについてもテーマに沿って企画し、がん登録に必要な情報から研究利用まで幅広く網羅した。新型コロナウイルス感染拡大による異例の開催方法にもかかわらず、本学会には多くの演題(研究発表や活動報告)が寄せられた。これを機に少しでも多くのがん登録やがん対策にかかわる人が増えて、継続的に幅広く活用がなされることを心から期待する。

データ活用としては、

- (1). 疾病対策の基礎となるデータ(罹患率・生存率)の分析として人・場所・時間の解析。
- (2). 疾病対策・医療計画への活用として、がん対策推進計画への貢献。
- (3). 市町村が行うがん検診の精度管理として感度・特異度・陽性反応的中度などを検診データと突合して評価するなどがあげられる。

日本は保健・医療が発達し、世界的に長寿を誇る先進国である。当たり前のように得られているがん統計であるが、これらを支える情報をできるだけ正しく収集し、整理して、対策に活用する。対策も疫学に基づいた実効性のある医療や保健活動を行い、正しく評価する。これらの土台を支える仕事を、一人ではなく大勢の関係者とともに発展・維持させていきたいと願う。

最後に、科学的であるとともに、住民や患者にわかりやすく正しく伝えていくことも重要であり、データは「すべての人のため」ということを心に留めたい。



参考文献

1) Last J. Epidemiology. Edited for the International Epidemiological Association. A Dictionary of Epidemiology 6th edition. New York: Oxford University Press, 2014:95.